# 「袋」で医療を支えて40年。多分野で活用される高度な品質

注射器やメスなど手術具を入れる滅菌バッグほか、各種医療用パッケージを製造する上田製袋。「ものづくりで医療を支える」をモットーに、40年の歴史を重ねてきた。

ここ10年では、生体組織を保存できるフッ素樹脂バッグを大学病院と共同開発。密閉性と－196℃での耐久性を、レーザー技術によって実現した。その技術は、医療分野だけでなく宇宙分野など他分野でも活用されている。社員の4割が20代で、若手中心にDX化にも積極的に取り組む。


**住　所**｜〒570-0002　大阪府守口市佐太中町2-13-22
**TEL**｜06-6916-5005　**FAX**｜06-6916-5006
**創　業**｜昭和42年10月　**設　立**｜平成元年10月
**資本金**｜1,000万円　**従業員**｜38名
**HP**｜https://uedaseitai.com/


**■主な事業内容**
「滅菌バッグ」をはじめとするメディカル向けパッケージ（袋）の製造

**■主な取引先（納品先）**
病院など医療施設

極み

### 変化する素材でも一定品質。研ぎ澄まされた五感が決め手

紙や不織布、フィルムなど異素材を貼り合わせて作られる滅菌バッグ。密着しにくいうえ、各素材は温度や湿度で形状が微妙に変化する。そのため、手で触れた際の感触や音などを敏感に感じ取り、一枚ずつ人の手で調整。一定品質の製品提供を実現している。

取り組み

### IT推進委員会を設けDX推進、各地で町工場DXの講演も

IT推進委員会を設置し、若手社員を中心に社内のDX化を推進。業務連絡用アプリを自作するなど、生産性の向上に取り組む。そうした活動は、「2020年版ものづくり白書」で取り上げられた。また、上田社長は「町工場のDX」と題して各地で講演活動も行う。

今後の展開

### 若い人材が生き生きと働く、「未来の町工場」を目指して

上田社長が目指すのは、デジタルとアナログが融合した「未来の町工場」だ。多くの業務をIT技術で自動化する一方、人の五感が必要不可欠なコア技術の次世代への継承に注力。若手に挑戦の機会を与え、「未来の町工場」を担う人材の育成にも励む。



# 上田製袋株式会社

上田製袋のキャラクター
（クリーヌ・メッキング・ヒートゥ）

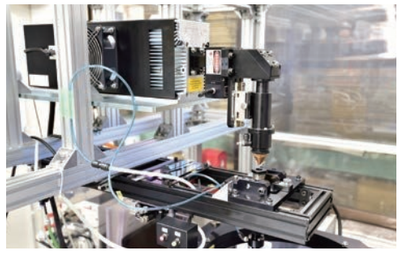
WEBサイト

代表取締役
**上田 克彦さん**

## 患者さんが笑顔を取り戻せるよう医療分野の一員として誠実に対応

昭和42年より製袋業を営み、医療用バッグの製造を始めて40年が経ちます。生体組織移植用のバッグは手術自体が年間200～300件と多くないため、大手企業は手を出したがりません。しかし当社は、医療分野の一員として使命と責任を全うすべく、他社が敬遠する仕事も誠実に対応し続けてきました。

この先も永く高品質な製品を提供できるよう、ベテランから若手へ知識や技術を伝承するとともに、若手中心に社内DX化を進めているところです。医療を受ける方が笑顔を取り戻すことを願い、全社員一丸で安心・安全の製品をお届けしてまいります。



レーザー溶着装置

よりよい袋をつくるためのチェック

タブレットによる生産状況の管理

推しポイント

### 福利厚生・働く魅力 職場環境

**メンター制度が入社の決め手に温かい昼食も提供**

同社では、新入社員一人ひとりにメンターがつき、業務のサポートや毎日の振り返りなどを行う。職場における不安や疑問を、迅速にすくい上げ解消することが目的だ。メンターを担う若手社員に対しては、研修を毎月開催。メンターの役割等を伝えるほか、メンター自身の精神的な負担を軽減するようにしている。この制度が決め手となり、入社に繋がるケースも多い。

また、料理の得意な社員があたたかい昼食を社内で振る舞う「上田食堂」を隔週で開催している。「昼食をお菓子ですませる社員もいたが、こうした昼食を利用し始めて動きが変わった」と上田社長はいう。